

【捕獲熟練者の意見】

- クマの骨格を知ることが第一。
- クマが立っているときや正面を向いているときはあごの下を狙う。
- クマが後ろ向きときは尻尾の付け根を狙う。
- 横から狙うときは前足を出したときに脇の下を狙う。
- クマが真横になっているときが一番狙いやすい。
- 心臓に当たっても40mぐらい走ってきたことがある。
- 心臓は体勢によって位置の把握が難しい。立ちあがると下がる。
- 肺に当たっていれば、のどを鳴らすので、出血していなくても音で分かる。
- 弾が当たれば声を出す。弾が当たったところを噛むような動作をする。
- 脳がしっかりしていると動いているもの目掛けて襲ってくることもある。
- 音がすると顔を背けるので、頭を狙うのはよくない。
- 頭を正面から狙って弾がはじかれたことがある。
- 肩骨に当たらないように気をつける。
- 急所に当たっても逃げるのもいれば、当たり所悪くても倒れるものもある。

ウ 発砲直後の対応と死亡の確認

発砲後は、すぐに次の弾を撃てる準備をしておきます。同時に着弾後のヒグマの動きをしっかり観察していることが重要です。

ヒグマがその場で即倒していれば、急所に当たっている可能性が高いので、しばらく様子を見ながら、二の矢を撃つかどうかを判断します。また、ヒグマが着弾箇所を噛むような仕草をしてその場で暴れまわることがあります。このようなときは、着弾していても、急所を外していることが多いので、すぐに二の矢を撃ちこむようにします。ヒグマが動いて逃げる場合は、できるだけ二の矢をかけますが、動いている状況では弾を命中させるのは難しいので、冷静に狙いを定める必要があります。

仮にヒグマが逃げたとしても、急所に当たっていれば数十メートルの範囲内に、倒れていることが確認できるはずですが、急所を外して逃げられた場合やヒグマが視界から外れた場合の対応については、次項を参照してください。

ヒグマが倒れていてもすぐに近づくことは危険です。遠巻きに距離を保ったまま、ヒグマをよく観察できて、なおかつヒグマより高い位置に回りこみます。ヒグマが大きく動くようであれば、頭や首を狙って止め矢を撃ちます。ヒグマに動きがなくなってからも、しばらくは様子を見て時間をおくことが大切です。

狩猟者によるヒグマの事故では、倒れて死んだと思ったヒグマに近づいて反撃されるケースが多くみられます。近づく前には必ず止め矢を撃ち、再度動きがないことを確認してから近づきます。ヒグマに近づくときは、ヒグマよりも高い位置を保ち、上あるいは横から近づきます。決して正面や下からは近づいてはいけません。また、銃はいつでも撃てるような準備をしておくことが大切です。

ヒグマの死亡を確認するのに、捕獲熟練者は下記のようにいろいろな部分に着目しています。初心者はこれらを総合的に判断して死亡の確認をするのがよいでしょう。

- ・手の掌 ⇒手の掌が見えていれば死んでいる。
- ・舌 ⇒舌が出ていれば死んでいる。
- ・毛が逆立っているかどうか ⇒毛がたおれていれば死んでいる。
- ・爪が開いているかどうか。 ⇒開いていれば死んでいる。
- ・目の動き
- ・胸の動き（心臓や呼吸）

【捕獲熟練者の意見】

- 決して油断をしない。
- 急所に当たっていれば、当たった瞬間に腰ががくっと落ちる。
- 着弾後、上に向かって走るクマはダメージが少ない。
- 倒れてもすぐには近づかない。完全に絶命していることを確認してから十分注意して近づく。
- 止めを撃ったときに、きちんと当たったかどうかを見ることが大切。
- すぐに撃てるような体勢で近づく。遠巻きに見ながら安全、慎重に対処する。
- 倒れていても後ろから近づく。決して頭（正面）からは近づかない。
- 近づいてからも棒でつついたり、石を投げてみて反応をみる。
- 手を前に出している場合には危険。

(6) 半矢のヒグマへの対応

ア 追跡の準備

弾が命中したにもかかわらず逃げたヒグマのことを「半矢」あるいは「手負い」と言います。半矢となったヒグマは、危険を招く恐れがあるので、本来は、半矢のヒグマを出さないことが理想です。しかし、万が一、半矢のヒグマが発生してしまったときのために、その後の対応の仕方をきちんと覚えておくことも必要です。

まず、ヒグマが半矢になってしまった場合は、すぐに追跡をせず、しばらく時間を置くことが鉄則です。すぐに追跡をはじめると、ヒグマも逃げようとするため、遠くに移動してしまい、回収が困難になります。ヒグマも追われていないことが分かれば、逃げるのをやめて、傷を癒すために体を休めます。損傷が大きければ、休んでいる間にそのまま出血多量で死亡することもあります。

追跡を開始するまでの間、可能であれば応援を頼みます。特に見通しが悪い状況やあらかじめ危険が予想される場合には、決して無理をせず、応援が来るのを待ちます。また、時間が遅いようであれば、日を改めて対応するのがよいでしょう。

【捕獲熟練者の意見】

- ・危険なときは一人で追わない。応援を頼む。
- ・追いかけると逃げて見失うことがある。
- ・血の跡があっても、すぐに追うものでない。30分から1時間後に追うべき。
- ・雪が残っているなど条件が良ければあせらず次の日に対応する。

イ 損傷の判断

半矢のヒグマに対応するときに重要なのは、ヒグマがどの程度損傷を受けているかを判断することです。一口に「半矢」と言っても、その状態はさまざまです。急所に命中していて、近くの藪の中で倒れていることもあれば、かすり傷程度でほとんど損傷がない場合もあります。

ヒグマの損傷を推測するポイントの一つは、着弾後のヒグマの動きです。例えば、ヒグマが斜面の上に向かってそのまま走ったのであれば、ダメージは少なく、急所を外している可能性が高くなります。反対に下に向かって動くようであれば、ダメージは大きいと言えるでしょう。

残された血痕も重要な手がかりになります。出血が多ければそれだけ損傷も大きく、出血が少なければ損傷も小さくなります。ただし、胸部の上のほうに着弾したときには、着弾地点では出血がみられず、しばらくしてから（胸に血がたまってから）出血することがあるので注意が必要です。

また、血の色が鮮やかで泡状の場合は肺や気管に、暗く赤色の場合は肝臓や腎臓周辺にそれぞれ着弾している可能性があります。胃や腸などの消化器系に着弾したときは、血液に混じって消化器内の内容物が飛び出すことがあり、この場合は急所を外れていることになるので、その後の対応は慎重にしなければなりません。

半矢になったヒグマは、しばしばササやブッシュの茂みに入ります。このような場所では、ササやブッシュについた血の高さから、傷口の位置を推測することもできます。また、弾が貫通していればヒグマが通った場所の左右に血痕が残ることになります。

雪があり足跡がみられるときには、ヒグマの足取りから得られる情報も重要です。手足に着弾していれば、足取りのパターンが不自然になります。また、ヒグマが休む間隔が短くなってくれば、損傷が大きくなっている証拠であり、近くにいる可能性も高まります。

【捕獲熟練者の意見】

- ・逃げる場合、坂を上がっていくかどうかをみる。
- ・血のつく高さや場所で、どの箇所にあたっているか見当をつける。
- ・腹に血がたまることがある。
- ・倒木をまたいだりくぐるときに残る血の場所で、傷口の位置を判断する。
- ・内蔵であればどす黒い血が多く出る。かすり傷程度であれば鮮やかな血が少量になる。

ウ 追跡のときの注意

最初に追跡する者のあいだで、半矢になったヒグマについて、大きさや構成（単独または親子）あるいは損傷の程度などの情報を共有します。特にヒグマの大きさは、撃った人には大きく見えていることが多いので、足跡などで改めて確認します。

追跡は必ず複数で行います。このとき、一人は足跡や血痕をたどり、その後ろに射手をつけて周囲を警戒するようにします。人数に余裕がある場合は、巻き狩りと同じ要領で見切りをして、待ちを配置した上で追跡します。

追跡は周囲を確認しながらゆっくりと進みます。前項での説明にあったように、血痕や足跡の状態をみながら、常にヒグマの状況を判断することが大切です。追われているヒグマが止め足を使うこともあります（次項参照）。ときには川の中をわざと歩いて逃げる場合もあります。また、余力があるヒグマは逃げようとしますが、損傷が大きいヒグマは、あまり動かずに身を潜めていることが多くなります。このように追い詰められた状態のヒグマは最も危険です。特に、次のような場所は、ヒグマが隠れていることが多いので、十分な警戒が必要です。

- ・木の根元
- ・倒木の下
- ・くぼ地
- ・灌木につるが巻きついているところ
- ・岩の陰

すでにヒグマが死んでいる場合には、カラスやキツネなど他の生き物によって、場所が分かることもあります。また、半矢のヒグマの対応には訓練された犬がいると効果的です。

【捕獲熟練者の意見】

- ・半矢になっていたら、茂みの濃いところに入る。
- ・血をたどっていると急にずれることがあるので注意する。
- ・追跡するときは直線的に歩かずジグザグに歩く。
- ・追跡する人の後ろには冷静で腕のよい射手をつける。
- ・半矢のクマも余力があれば逃げるが追い詰められたら逆襲する。中途半端な傷が危険。
- ・死ぬ寸前まで弱っていると丸まっている。そうでなければ顔を起こしたり、にらんでくる。

(7) 注意すべきヒグマの生態

ア 止め足

積雪があり足跡が残るような状態のとき、ヒグマが自分の通った場所を分からなくするために「止め足」というものを使うことがあります。特に、冬眠あるいは休息の場所に移動するときや、狩猟者に追われているときに止め足を使います。

典型的な止め足は、ヒグマが一度歩いた場所をそのまま戻り、脇に跳ぶというものです。戻るときには、そのまま同じ足跡をたどりますので、よほど注意していなければ見逃してしまいます。ヒグマを追っていて、足跡が急に途切れたときは、止め足を疑う必要があります。周辺に足跡がないか慎重に探りながら戻ります。ときには、雪のない場所や倒木の上を歩いて足跡を紛らわせることもあります。

ヒグマが止め足を使うのは、それだけ警戒をしている証拠でもあります。追跡しているときに止め足が使われたのであれば、ヒグマがこちらの気配に気づいている可能性が高くなります。

基本的に止め足は、逃げるために使うものであり、すぐにヒグマが襲ってくるわけではありません。ただし、半矢のヒグマや気が荒いヒグマの場合は、止め足を利用して人間を襲ってくる場合があります。このようなヒグマを追跡しているときの止め足には注意が必要です。

止め足に惑わされないようにするには、追跡しているときに常に周囲を警戒し、目の前だけでなく少し離れた前方の足跡を確認するようにすることが大切です。

【捕獲熟練者の意見】

- ・足跡をそのまま 10m ぐらい戻り、脇に跳ばれた。
- ・止め足を何度もジグザグに繰り返すことがある。
沢を歩いていて急に斜面を上ったり、倒木の上や川の中を歩くのも止め足の一種。
- ・寝るだけなら止め足は少ない。穴に入る前はたくさん止め足を使う。
- ・止め足があったら上に気をつける。
- ・止め足を使われて気づいたらすぐ脇に来ていてうなられた。
- ・大きいクマが使うことが多い。
- ・半矢でなければ止め足で襲ってくることはない。半矢のクマの止め足は危険。

イ 親子のヒグマ

ヒグマの子は生まれてから1年半から2年半の間、母親と行動を共にします。この時期のヒグマの親は子どもを守ろうとする意識が高いため、近づくのは危険です。特に子グマも1歳（明け2歳）ぐらいになると、親から離れて遊んだり、歩いたりすることがあります。また、危険を感じると、子グマを木に登らせて、親がその場を離れることもあります。子グマがいるときには、必ず近くに親がいることを意識しなければいけません。

捕獲熟練者の中には、親子のヒグマは捕獲しないという人もいます。ヒグマの狩猟を継続し、ヒグマという種を存続させるためには、このような意識も大切です。

ただし、被害が発生するなどして、どうしても親子のヒグマを捕獲しなければいけないときには、慎重に対応する必要があります。その場合、必ず親から先に捕獲しなければいけません。子グマを先に撃ってしまうと、近くにいる親が襲ってくる可能性があります。仮に子グマの姿しか見えなくても、撃つのは控えて近くの親を探すようにします。

【捕獲熟練者の意見】

- 無駄な殺生はしない。子連れは撃たない。
- 親を先に捕獲する。子がいても撃たないで親を探す。子を先に撃つと親がかかってくることもある。
- 子が複数のときは別々に逃げることが多い。
- 親は絶命しにくいので、安全のためきちんと死亡を確認するほうがよい。

■木に登った子グマ



3 箱わなによる捕獲（狩猟で箱わなは使用できません）

(1) 箱わなの構造

ア 形状と仕組み

箱わなの形状には檻タイプのものでドラム缶タイプのもの2種類があります。檻タイプの箱わなは最も一般的に使用されているものです。ヒグマが中の餌を引っ張ると扉が閉まるものやヒグマが踏み板を踏むと扉が閉まるものがあります。

ドラム缶タイプについては、本来はヒグマを麻酔して放逐するために、学術目的の捕獲などで使われるものです。捕獲されたヒグマが暴れにくいので麻酔がかけやすく、ヒグマの爪や歯も傷つきにくい構造になっています。一方で、捕殺を前提とした有害鳥獣捕獲で使用するには、止めさしが撃ちにくいという問題が出てきますので、使用用途によっては一考が必要です。

■檻タイプ



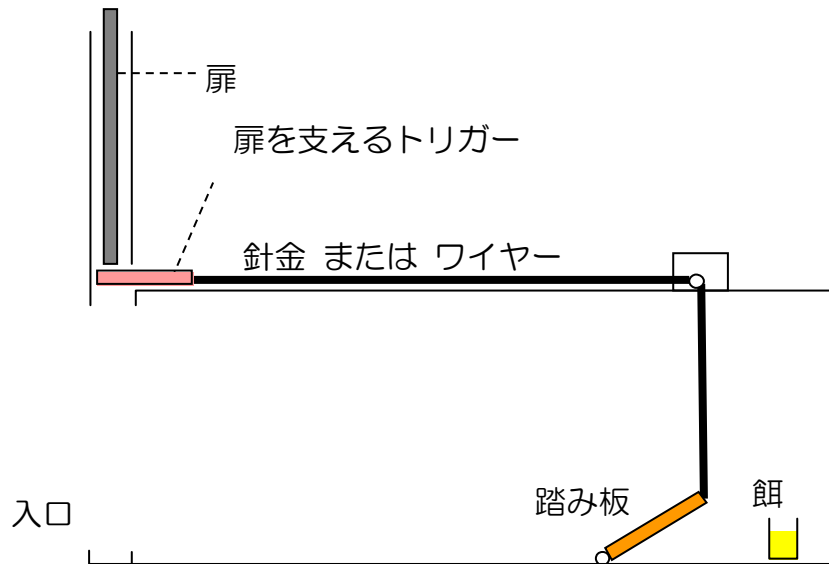
<捕殺処分が前提>

■ドラム缶タイプ



<放逐処分が前提>

- 箱わなの構造（踏み板式） -



■箱わな（踏み板式）



ワイヤー連結部の金具

踏み板

餌